

飯について

毎日たべているくせん「飯」というものの概念
或は厚紙のついで、ゆきほじまらぬ方が多い。

上代では、米は甑コシキで蒸してたべたのです。

甑コシキというのは、蒸す器うつわです。四角の竹や

四角のやちいろうくあります、あつめの

のは瓦製で底に蒸気を通す小さな孔が

あります。それが今は木製で竹の葉を敷いた

所謂蒸籠コシキになりました。——まあ、とんかつ

若は米を蒸してたべたのです。つまりオコウカ

常食だったのです。蒸飯コシキを作ると「かし

く」といふでしょう？、この「かし」は「こしき」

のが普通でしよ。なれど「あさけ」「ゆふけ」「朝
食」「夕食」の名詞は有りませぬ。「ひるけ」「まき食

といふ言葉は、その頃の文章には有りませぬ。江戸

^{末期}の作家柳亭種彦の随筆「柳亭記」を

よむと、その江戸末期でも「晝飯」といふ言葉

は用ひたまふで、元來は「晝飯」をいふて言葉

はなつものだと書いてあります。さういふ心ある人々

は「晝食」といふ「夕飯」と呼ぶ、晝

に入ると「夕飯」を「晝食」といふ、清くも「晝食

と」といふ言葉は使ひませぬの事。さういふこと。さういふこと。

一む三食とあるのは、田舎で下宿する人々の事

で、農夫は労働はげし大の、自然に三

食のうらなのおといふこと。 — ちるほど。

そつゝえはあしゆまの「次の草子」は、大工

かかつがツ ^中食をてらうのこ、いかりも、どの

めぢらしけん親父を書いてあります。「中食」

とは書飯のこと。「中飯」^{チキ}「書休み」^と「水時」

— 時々のぬけの食う飯とかいふはれすえ。

~~味書物言の北條丹康の書子。氏名不明~~

ゆゑ士は朝夕二食をとるのめ、常言で「大。いんあし

年間 ^の (三百七十年前) の書物である。「公新母草子」の

は「夕飯食うさえ佛はいましめて水時と名おけはる。

すゝと昼飯くす事、佛の心にならうとすゝすゝ

と説いてありませう。佛家では一日一食たう大事

加つては著雑談」といふ中々書いてあつた。 徳島

和尙の段と書らうとつたが、天平時代の名を、

その頃の如きは、この戒律は守られたか、

—鎌倉時代、室町時代、と、この間の園民生

活の代表者は、いふまでもなく武人である。とい

ふと彼等は、おのれの権執力や威力をせし示す

ため、邸宅を宏壮豪華の慶し、衣服や調交

いの四柱を誇つたもので、食物は意にお

ひ質すわで、糸の去の利休の茶や山を誇れた

時、利休の歩大馳走は、たとい女お道のウじか

あつた、麦飯、大根葉の汁といつたもの

で、家康の丈草の長平を馬内の定に

まじりつとよふけ大馳走は、妻飯つまいイナガの汁、

コンニヤクの煮附です。そんな粗食でした。また家

康の居る所(新田)の人 齋美左衛門の定ん

訪れ大 其時、吾左衛門が揚き米マイの飯を合

ころのころと ●茶碗と 作りつけ 話のすりあがり。

吾左衛門は巨匠府内洋一ツヨリキラズと云

飯の作りとて 細い ころのころと白く見えそののですと

懐かしうつく、やうと云家康のお外いめをまめぬのれん

255 page.